



# キジーと バグルと はちみつ

トラッジと ジッピーが 森の中を歩いていると、2ひきのハチが  
通り過ぎて行きました。

「つかまえるからな！」 1ぴきがブンブンと羽音を立てました。

「追いかけるの、やめて！」と、もう1ぴきがさけびました。

「わたし、何もしてないわ。」



「パイロットかい？」と、  
ジッピーが たずねました。

「今は話してる ひま ないんだ。キジーをつかまえないと。ぼくのはちみつを  
ぬすんだんだ！」

「ぬすんで ないわ！」 木々の間を通りぬけながら、キジーがさけびました。  
しばらくすると、キジーはつかれてしまいました。「助けて！」と、キジー。

トラッジも ジッピーも、どうしたらいいか、分かりません。





「ほら、つかまえたぞ！」と、パイロット。

パイロットはそばに飛んできてキジーをつかみ、地面に引き下ろしました。

キジーはさけび声を上げました。

「ぼくのはちみつは、どこに行ったんだ？」パイロットがおこって言いました。




「もうないわ。」キジーはそう言って、泣き始めました。

「全部食べちゃったのか？」と、パイロット。

「食べてないわ。だけど、もうないの。ごめんなさい。」

すると、パイロットがますます腹を立てたので、キジーはもっと泣き始めました。





「パイロット、ごめんなさいって  
言ってるじゃないか。」と、  
トラッジ。



「だけど、ぼくのはちみつは取ったじゃないか。」

「もしそうだったとしても、彼女を泣かせたからって、はちみつはもどってこないよ。」と、ジッピー。

パイロットはプンプン おこりながら、キジーを放しました。「ぼくは  
おこってるんだ。」



「一体、どうしたんだい？」と、ジッピーがたずねました。

キジーはしくしく泣きながら、言葉につまりました。

「わたし・・・わたし・・・」

「確かに取ったんだろ。言いわけなんか、できないさ。」と、パイロット。





「パイロット、キジーに、どうしてはちみつを取ったのか、<sup>と</sup>説明する <sup>きかい</sup>機会を  
あげてよ。」と、トラッジが <sup>い</sup>言いました。

「さあ、何が <sup>なに</sup>あったのか、<sup>はな</sup>話してごらんよ。」と、トラッジが <sup>い</sup>キジーに <sup>い</sup>言いました。

「今朝、<sup>けさ</sup>巣箱を <sup>すばこ</sup>出ると・・・」



今日は、<sup>きょう</sup>みつ集めには <sup>あつ</sup>最高の <sup>さいこう</sup>日 <sup>ひ</sup>和でした。キジーは、<sup>あさはや</sup>朝早くから、せつせと  
みつを <sup>あつ</sup>集め <sup>はじめ</sup>ました。こんなに <sup>かみさま</sup>すてきな <sup>かんしや</sup>日 <sup>ひ</sup>や <sup>しあわ</sup>幸せな <sup>いえ</sup>家 <sup>あた</sup>を <sup>い</sup>与えて <sup>あ</sup>くださった  
ことを <sup>と</sup>神様に <sup>かみさま</sup>感謝しながら、キジーは <sup>さいこう</sup>最高に <sup>あま</sup>あざやかで <sup>かお</sup>甘い <sup>かほ</sup>香りの <sup>はな</sup>する <sup>はな</sup>花  
を <sup>と</sup>さがして <sup>まわ</sup>飛び回っていました。





すると、悲しそうな声が風に乗って聞こえてきました。キジーが声の元をたどってみると、子グマが草むらの中でうずくまっていた。キジーは、そばまで飛んで行きました。

「どうしたの？」と、キジーは子グマにたずねました。



「まい子になっちゃったの！」子グマが泣きながら答えました。

「まあ、どうしてそんなことになっちゃったの？」

「遊んでいたら、いつのまにかママからはぐれちゃったんだ。ママがどこにも見つからないの。こわくて、おなかもすいちゃった。」





「<sup>なまえ</sup>名前は？」と、キジーが たずねました。  
「バグル。」  
「<sup>なに</sup>何かの <sup>たす</sup>助けになれると <sup>おも</sup>思うわ、バグル。  
おなかが すいているなら、はちみつを <sup>た</sup>食べたら  
<sup>げんき</sup>元気に なれそうかな？」

「はちみつは <sup>だいす</sup>大好き！」  
「じゃあ、ちょっと <sup>ま</sup>待っててね。  
すぐ <sup>く</sup>もどって 来るわ。」





キジーは子グマをそばの草むらに落ち着かせると、巣箱に向かいました。

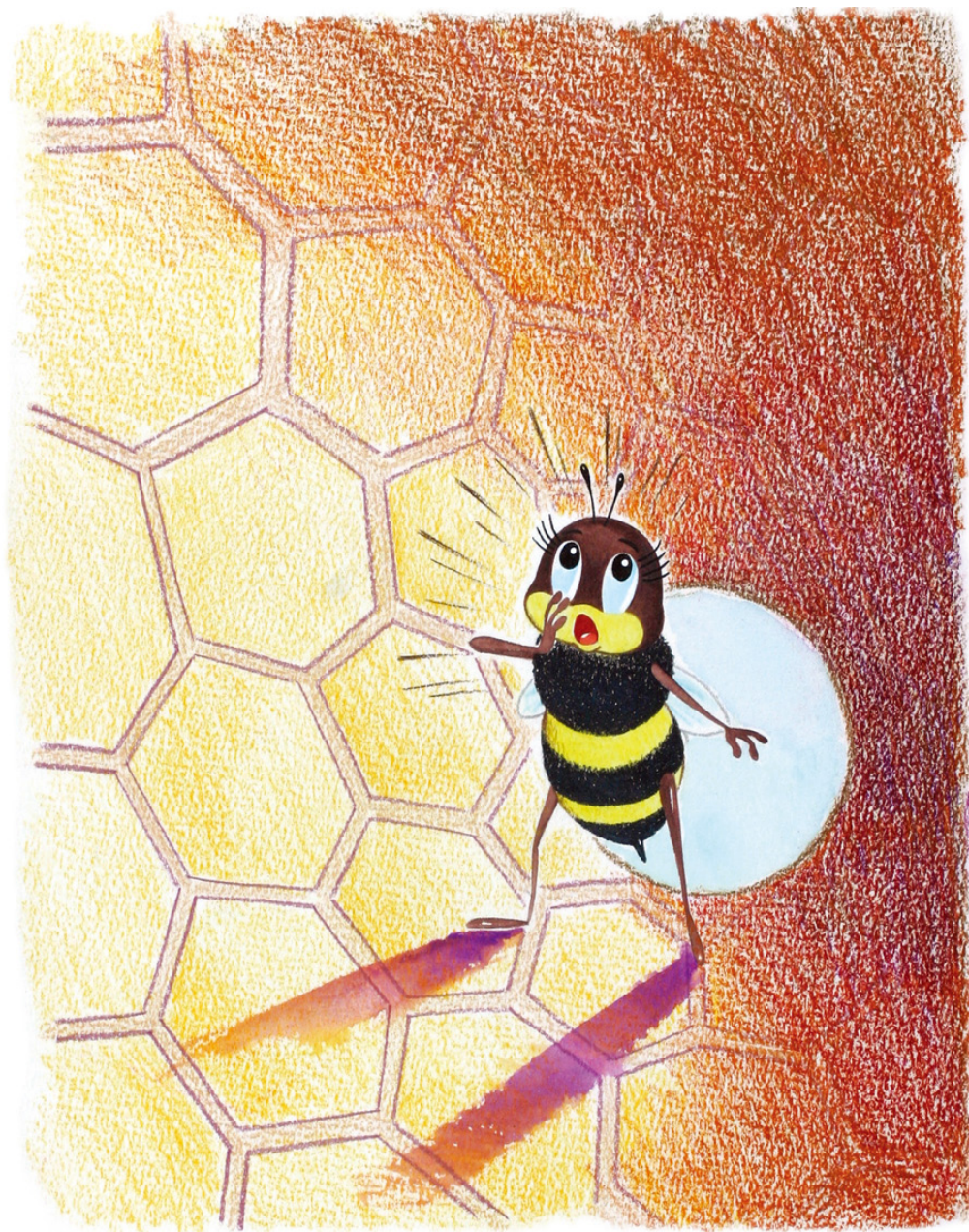


キジーは、巣箱からはちみつを葉っぱにくるんで運んで来ました。そして、何度も行ったり来たりしている間、バグルは葉っぱのはちみつをなめていました。やがて、キジーのはちみつはなくなってしまいました。





「まだ、おなか すいてる？」 キジーが バグルに たずねました。  
「うん、<sup>すこ</sup>少しね。」  
キジーは <sup>かんが</sup>ちょっと 考えていました。（どうしたら いいかしら？  
そうだ、いいことがある！）



キジーは <sup>すほこ</sup>巣箱にもどりました。「パイロット！ パイロット！」  
キジーは <sup>なんど</sup>何度も よびましたが、<sup>へんじ</sup>返事がありません。



「きっと、みつを集めて出かけているんだわ。パイロットのはちみつを、ちょっと借りましょう。彼を見かけたら説明するわ。  
今度 はちみつを作った時に返せるもの。彼はきっと気にしないわ。」



キジーはパイロットのはちみつをすくって葉っぱでくるみ、バグルの元へと飛んでいきました。





「ほんとにありがとう、キジー。ずいぶん気分が良くなったよ。」

そう言うと、バグルはうでをのばして、あくびをしました。

「お母さんをさがしてきてあげるから、その間、ちょっとお昼ねでもしていたら？」

「君って、とっても親切なハチなんだね。」

「お役に立てて、とてもうれしいわ。」



バグルがうずくまってねむってしまうと、キジーはバグルのお母さんをさがしに行きました。まもなくすると、キジーはバグルのお母さんといっしょにもどって来ました。

「まい子のバグルを見つけてくれて、ありがとう。」と、バグルのお母さんがキジーに言いました。

「どういたしまして。さようなら！」





キジーは、またみつをさがしはじめました。するととつぜん、パイロットがおこってキジーをよんでいるのが聞こえました。（まあ、おこっているわ。）



「ごめんね、キジー。今日は、ついてない日だったんだ。最初に君の話を聞くべきだったよ。」と、パイロット。

「いいのよ。借りたはちみつは、ちゃんと返すわ。」と、キジー。

「いいよ。はちみつはたっぷりあるから。」





「ね、ちゃんと話せば、解決するんだ。」と、トラッジ。  
「だれだって、誤解することはあるさ。友だち同士でもね。」と、ジッピー。  
「おこる前に、まずは話し合ってみるのが一番だね。じょうきょうをすべて理解しているわけじゃないもの。」



「本当に そうだね。今度はこのことをちゃんと覚えておくよ。」と、パイロット。

「ねえ。はちみつのことを話していたら、おなかすいちゃったよ。」舌なめずりをしながら、ジッピーが言いました。

「じゃあ、みんな、ぼくについておいでよ。まだはちみつが残っているから、ごちそうするよ。」と、パイロットが言いました。

このシリーズの他のお話「トラッジとジッピー」と「ちがいはあるけど仲間だよ」も、ぜひ読んでね。